



saishoji.info

さいしゅうじ
西照寺宗派 真土真宗
浄土本願

第103号 令和8年1月

プンダリーカ

びやくれんげ
一白蓮華一

光に遇う

本願寺派 布教使 西原 祐治

元旦がんたんのことです。妻つまが「珍しい人から年賀状ねんがじょうが届とどいています」と言いました。その年賀状は八年前にお浄土じょうどへ往いった父から、私にあてられた年賀状でした。実は、この年賀状は私が出したものでした。正月しょうがつを迎むかえる一週間前のことです。来年は何を大切にして過すごそうかと考えていた時、「そうだ、大切な言葉を、父からの年賀状という形にして自分に届けよう」と思ったのです。そして「珍しい人から……」となったのでした。自分で書いたものではありませんが、書かれています言葉が浄土から届けられたような気持ちになり、とても有り難ありがたい縁えんとなりました。（中略）

おそらく正月に思ったことは、思っただけならば、時の過ぎゆくほどに失念しつねんしていたのだと思います。しかし、父からの年賀状として届いて見ると、大切な言葉

はいつも私の思いの中にあります。

さてその父からの年賀状には「ご報謝ほうしゃの一年を送おくってください。父 正念」とあります。ご報謝とはお礼れいするということです。しかし、お礼や感謝かんしゃにもいろいろあります。もう三十数年も前のことです。あるご家庭かていに、法事ほうじのご縁をいただいて伺うかがった時のことです。読経どきぎょうを終え、お茶を飲みながら世間話せけんわなしをしていました。すると家の方が、「今の若い人は感謝という言葉も知らない」と言われます。会話かいわの内容ないようは、個人商店こじんしょうてんであるそのお宅たくに、高校を卒業そつぎょうした一人の若者しゅうしやくが就職してきました。話の流れの中で「感謝しなさい」と言っただけです。するとその青年から「奥さん、感謝って何ですか」という言葉が返かえってきたというのです。

私も話題わだいに同調どうちようして、感謝ということを知っている側に立たち「そうですね、そうですね」と相づちを打ちました。その相づちを打つ私の心の隅すみに、感謝の心は良い心、仏さまに近ちかい心という価値判断かちはんだんがありました。

その日、お寺へ帰かえってぼんやりしていると、突然とつぜん、仏さまからしかられたような感覚かんかくをもったのです。その感覚を言葉にすれば、「お前は勝手かつてだなあ」ということです。何が勝手かといえ、自分に都合つごうがよいと何度でも感謝するが、自分に不利益ふりえきがあつたり都合が悪いことであれば、感謝どころではない。それがお前の現実げんじつではないか、ということです。私の感謝についての浅い理解りかいを言い当てられたような気持ちになり、恥はずかしく思いました。誠にその通りです。私が抱いだく感謝の心は仏さまに近い心どころか、私という我欲がよく、自己中心じこちゅうしん的な心を一歩も離はなれていないのです。それが私の偽いつわりのない姿すがただったのでした。

この我欲によつた感謝ではなく、すでに恵めぐまれていることへの気づきを縁とした感謝が大切です。そして何よりも大事なことは、私の感謝が我欲を一歩も離れていないという気づきも、すでに恵まれてることへの気づきも、ともに阿弥陀あみださまの智慧ちえのみ光ひかりによつてもたらされるということです。

『浄土真宗 やわらか法話3』（本願寺出版社）より引用
掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています